

流域情報

あらかわ



発行●NPO法人荒川流域ネットワーク編集委員会／編集人●鈴木勝行
 住所●358-0046埼玉県入間市南峯400-4 FAX04-2936-4120
 ホームページ●<http://arariver.org/>



荒川太郎衛門自然再生事業地中池

写真提供・木崎芳雄氏(入間市写真連盟事務局長)

CONTENTS

- ① 50年前と100年後の環境を観る
12年目の“ネットワーク”
- ② Network Information
荒川中流域一斉クリーン
Network News
エイドを実施
荒川流域水環境
シンポジウムの開催報告
- ③ Network News
「荒川水源地域フォーラム」
の開催報告
【自然再生通信】
入間川の堰・魚道見学会
- ④ 森づくりの現場から Vol.5
多摩川源流での「百年の森づくり」(後編)
- ⑤ ちょっと気になるトンボ Vol.2
オオキトンボ
- ⑥ いきもの道・魚の道
荒川の魚・特にアユについての
「試験研究成果からの提言」(後編)
- ⑦ アキアカネ個体数調査の
ご案内
- ⑧ 流域活動団体の
イベント・カレンダー
2007年8～10月

50年前と100年後の環境を観る
12年目の“ネットワーク”

荒川流域ネットワーク代表 恵 小百合

荒川の支流の数は、総数129で6～7本以外は、全て荒川右岸にある。神谷博先生(法政大学エコ研・水系デザイン)によれば、2万5000年前の水河期、海が後退し、荒川も利根川も多摩川も古東京川という一つの流れとして浦賀水道へと続いていたという。

荒川流域ネットワークは、今年の定時総会における役員改選により、新理事・新監事に荒川下流域、新河岸川流域、東京都青梅市の霞川流域から役員をお迎えして、初めて甲武信ヶ岳に源流を持つ

荒川が東京湾へと流入する1本の川を支える活動をしている皆さんが集い、ひとつの流域として一緒に活動を展開することとなった。新体制の詳細については、ホームページをご覧ください。

6月3日の「荒川流域一斉水質調査」では7月10日現在の集計では、365ポイントの水質測定データが寄せられ、皆様の継続的な参加と河川水質への関心とともに、今年から硝酸態窒素測定を加え、全窒素の測定と計算をしていただいた。

荒川クリーンエイドフォーラム佐藤

正兵代表の言われる「魚などの生き物がいるだけではなく、香りもよくおいしく食べられるか」という質が問えるようになった。上中流の水質如何により、下流、海の魚が安全でおいしいかが決まる。新しい指標は、食物連鎖の中で生物濃縮される汚染物質を内臓に含まない魚ということになる。そのために、荒川流域各地で食べられる安全な魚のすむ川キャンペーンを展開する時期が到来したのかもしれない。

その魚が荒川を遡っていけるように一本の荒川を目指した「入間川の堰と魚道の調査」を6月24日に実施し、50～100年間の農業生産のための用水と堰の現在の姿を現地で魚道の専門家の君塚芳輝氏とともに確認した。これを受けて、7月8日に2007年第1回みずかけ“サ”

論「アユは越辺川・入間川を上れるか？」を入間市民活動センターで開催した。荒川支流にもアユが遡上できるようにという議論から始めたが、農業用の取水堰を設けると下流側で極端に河床が掘れるという物理現象を引き起こす巨大な水のエネルギーに一同唖然とした現地調査の結果を踏まえ、君塚氏からアドバイスと提案があった。

7月22日には、第8回絶滅危惧種ミズガキ復活キャンペーンを実施した。高麗川巾着田でゴミ拾いを行い、上流で関根文明さん指導のもと投網講習会と魚類調査を行った。

7月28・29日に開催された第8回荒川流域水環境シンポジウムでは、共催の東京国際大学荒井孝昌学長から、荒川流域に関するシンポジウムなどの会場とし

て大学がご協力いただける旨のお話があった。また、荒川上流河川事務所古賀俊行所長のご挨拶と冒頭にご紹介した神谷先生の講演があり、一つの流域市民として集った源流から海までの活動団体や個人それぞれが実行することを確認。目から鱗の新たな展開に移った印象のある会合となった。

9月29日(土)には、SIF-Japan(社会的責任投資フォーラム)主催で荒川流域ネットワークの12年間の活動を対象として、社会的責任投資フォーラムのような投資家は、どう見るのか、議論してもらう予定である。最近コミュニティ投資という考え方で、地域で活動しているNPOがその仲間たちのみの活動を展開するのではなく、活動することで地域への刺激となり、その結果、地域が活

性化したり、コミュニティが復活したり形成すること繋がるのであれば、投資しようという動きがある。

70年前の河川の直線化、50年間になされた河川敷への不法投棄や砂利採取、堰や落差工等の河川横断構造物の設置による河川環境への影響を、今後の100年間にわたりどのように改善したり、具体的な手段を検討し、行動すべきかがここで、一気に問われてきている。

一見個別に見える課題が統合的・連動的に扱えないと解決されないこともある。とくに、荒川・利根川・多摩川という流域連携が土台に構築されることで、企業、行政に対する改革を伴う大きなパラダイム(paradigm 枠組み)の変換を市民からも提言していく必要が見えてきている。

NetWork Information 1

今年から10月7日に荒川中流域一斉クリーンエイドを実施。参加団体を募集

今年度から下流のクリーンエイド・フォーラムが永年続けてきた荒川の河川敷のゴミ清掃に連携して、荒川流域ネットワークも中流域をフィールドに

一斉クリーンエイドを実施することになった。荒川下流のゴミの多くは、上・中流から流れてきたものであり、下流のゴミを減らすためには、上・中流の

河川の中や河川敷のゴミ清掃は欠かせない。上・中流域では、スズメバチの活動期を避けるために10月7日に統一日として実施することとした。既に清掃活動を実施している団体も多数あると思うが、是非多くの団体の参加をお願いしたい。参加の連絡は事務局まで。

NetWork News 1

流域の諸課題を上中下流の人々が語り合う「荒川流域水環境シンポジウム」が開催された

荒川流域ネットワークが実行委員会に参加している第8回荒川流域水環境シンポジウムが7月28・29日に、東京国際大学で66名が参加して開催された。

午前中は、3つの分科会に分かれて協議を行った。「荒川流域のゴミ問題」についての分科会では、新河岸川の河川敷に埋められたPCBなどの化学物質の処理についての取り組み状況と荒川クリーンエイドのこれまでの活動についての報告があった。荒川上流事務所からは、荒川の河川敷での不法投棄の実態についての話があり、桶川市で、昔から荒川と江川で不法投棄や焼却・埋設を見てきた天沼氏から中下流域での深刻な実態報告があった。

「魚が行き交う川作り」の分科会では、熊谷で昭和24年まで鵜飼をしていた蓮沼氏から昔、荒川各地で行われてきたカワウを使った鵜飼についての話があ

り、1羽の鵜で生計が成り立ったが、法律によって禁止されたということであつた。県漁連の矢沢氏からは、荒川の自然環境が失われて魚が減った状態を改善するために魚床を作るなどの様々な取り組みについて報告があり、他の活度団体とも協力態勢を作って行きたいという意志表明もあった。最後に水資源機構秋ヶ瀬管理所の中村氏から古い魚道に様々な手を加えながら改善をしてきた取り組みについての報告があった。「源流の森を生かす流域経営」の分科会では、東京大学秩父演習林の藤原氏が秩父演習林の特徴や一般市民への開放の取り組みについて、埼玉県農林総合研究センター森林・緑化研究所大河原氏が埼玉県産材の強度試験を基にした品質について、また、日本古来の工法である板倉作りを通して山、工務店、市民をつなぐ取り組みついて



(株)アンビエックスの相根氏からお話があった。

午後の全体会では、神谷氏から東京水圏の地理的歴史の変遷と将来についての講演があり、2万5000年という長いスパンで流域を捉えることの重要性を語った。

全体会が終わった後、場所を森林公園に移して上中下流の人が交流会を行い各地での活動報告情報交換を行った。

29日は、玉淀ダム方面と荒川太郎衛門自然再生事業地方面の2コースに分かれ、荒川上流河川事務所によるバスの提供や、説明のための職員の派遣など、全面的な協力のもと、荒川の各ポイントの現地見学会を行った。



「荒川水源地域フォーラム」が7月16日、秩父市大滝体育館で開催された

森・水・人が共生する荒川流域交流圏の形成を考えるシンポジウムで、主催は「荒川源流ダム水源地域ビジョン推進委員会」（秩父市、大滝商工会、国交省関東地方整備局などで組織）。

台風一過、青空が時折顔を見せる中、午前には二瀬ダムと滝沢ダムを見学した。二瀬ダムでは毎秒20t、滝沢ダムでは毎秒30tの大量の放流が行われていた。滝沢ダムでは、湛水前訪れた時、谷底から見上げていた満水時の水面の高さを、今は上から見下ろしていることがわかり、水の量の多さに二度びっくり。

午後は、「モノづくり」「仕組みづくり」「ヒトづくり」の3つグループに分かれ、分科会が行われた。

分科会の後の全体会では、宮林東京農

大教授がコーディネーターを務め各グループ発表、意見交換が行われた。

「ヒトづくり」のグループからは、高齢化が進んだ生活圏のあり方が大きな問題だが、多くの人は無関心。そうした人たちに水源地域に関心を持ってもらう方法として、体験学習を実施するプロの人材育成が必要。多チャンネルによる情報発信や情報収集の受け皿など、さまざまな参加システムをつくる必要があるという発表が行われた。

最後に、上流域の技・匠を流域の人に知ってもらい、流域の繋がりを明確にすることにより、人と人、川と人の関わりを再認識し、水源地域を共通の財産と認め、協力団体が年に一度水源地に集おうと締めくくった。（双木茂芳）

木崎芳雄氏がホームページ「写真館」を開設

本誌の扉を飾る荒川流域の写真を毎回ご好意で撮影してくれている入間市写真連盟事務局長の木崎芳雄氏が、ホームページを開設した。氏の故郷の奥武蔵の風景やブナの原生林の写真など木崎氏が永年撮り続けた美しい自然や里山の風景が多数掲載されている。是非ご覧頂きたい。ホームページのアドレスは以下の通り。

<http://www.kizakiyoshio.com/>



2007年第1回みずかけ“サ”論現地見学会

自然再生通信

「入間川・越辺川をアユは上れるか？」をテーマに見学会 遡上するアユの前に立ちはだかる幾多の障害物。自然復元には理解と連携が不可欠

入間川の堰の見学会は、22名が参加して、車で移動しながら川越市にある2か所の堰と狭山市にある3か所の堰を見学した。堰や魚道についての解説は、淡水魚と魚道の専門家である君塚芳輝氏にお願いした。

最初に見学した菅間堰は、入間川と越辺川の合流点の直下にある堰。ここを上れないと入間川水系の全ての支流に行けないことになる。堰の建設は昭和24年で、出来てから58年たっている。永年の増水時の洗堀と荒川本流の河床低下の影響で、目算で3～4mの落差が



川越市にある寺山堰を見学する参加者

出来ていた。現在は、掘削部分にコンクリートのブロックが多数置かれ堰の崩壊を防いでいる。君塚氏によるとブロックによる流れの乱れが起り、アユでもこの落差は上ることができず、荒川本流に近いという位置を考えると早急に魚道を設置すべきだという意見だった。

次に見たのは、3kmほど上流の寺山堰。昭和35年に出来た堰で、堰の洗堀はそれほど起こっていなかったが、取り外し可能な木製の板が、そのままになっており、魚道もなく魚は遡上できない。魚道の設置が必要であるが、この規模の魚道であれば、それほど予算は掛からないだろうという話であった。

3番目に見た上奥富堰は、昭和50年代の後半に全てコンクリートの堰に造り変えたそうである。管理は狭山市が行っている。現在ここも洗堀が進み、目算で4～5mの段差が生じている。堰の崩壊と洗堀を防ぐため堰の下流部に大量のコンクリートブロックを投入している。一見して魚は全く遡上できない。

君塚氏は、堰の全面改築と本格的な魚道の設置が必要だと語った。

4番目の笹井用水堰は、3つの水門を持つ本格的な堰である。堰の竣工は昭和14年である。ここも上奥富堰程ではないが、洗堀による1～2m前後の落差ができていた。左岸側に直角に曲がった魚道が設置されているが、君塚氏によれば、“あればええんや！”型魚道で問題が多く、ほとんど機能していないと思われるので、新たな魚道を設置し直した方がいいということだった。

最後に少し下流に戻って、豊水橋の根固めダムを見学した。魚道は14～15年前に設置されたそうだ。出鱈目の魚道で、魚道が下部で中央方向にカーブしていて堆砂が進み、入り口の部分が狭くなっていないため、君塚氏によるとあまり遡上していないのではないかとのことであった。

入間川は、現状ではアユを初め魚が自由に遡上できる環境にないが、堰それぞれの課題を克服するための繋がりができれば、昔のようなアユが行き来できる入間川を復元することは、不可能ではないと思う。今回の見学会はその第一歩である。（鈴木勝行）

「源流の木」の製品化とボラティアによる古道の再生を通して源流域を再生し、繋げたい

4号で掲載した東京電力(株)が小菅村で進めている「森づくり」についての講義の後編を掲載する。

＊

森と人の暮らしを繋げることで、持続可能性のある社会を目指し、資源の循環型利用とエネルギー消費量の削減、熱とCO₂の吸収源である森林の保全とその資源の利用について、3年前から取り組み始めた。多摩川源流では、持続可能性のある森づくりを「百年の森づくり」というメッセージに託した。育てながら使うという理念のもとに、まずは350畝のモデル森林を持続可能な森林にどう再生するか検討し、資源調査に基づいて森林再生ビジョンを策定した。

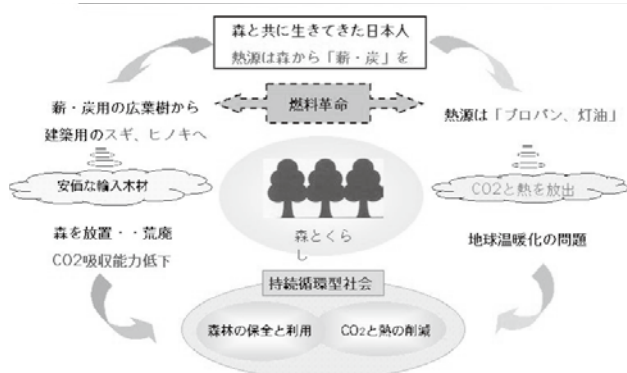
現在ポイントとして議論していることは、使われなくなってしまった間伐材(小径木)を山腹の保全工に、きめ細かく使っていくこと。今まではコンクリートを使っていたものを山の資源を使って山を守るという視点に変えることである。合わせて、間伐材を使って、高密度の森林内路網の整備を検討している。

山の木をいかに伐り出しやすくし、山を強くするかということをお大阪府指導林家の大橋慶三郎先生に教えて頂きながら進めている。

無理に針葉樹を植えてしまったところは、地域の遺伝子を持った広葉樹の森を再生していくことにした。郷土種で苗を作って広葉樹を育てるということをやってきたが、そうした技術を応用しながら取り組むことになる。

一番大切なのが森林資源の利用だが、

■森とつながる暮らしを取り戻すために



小菅村の森林は薪炭林だったので、伝統的な林業地ではない。育った木を「源流の木」という名前で、中・下流域の人たちに産地直送するに決めた。現在は、流域の中で繋がりを必要としなくなっていたが、消費者・設計者・素材生産者のそれぞれが、顔の見える関係にしようということである。今使っているものが持続可能性があるのかを我々の世代が考えることが重要だと思う。

もう一つ可能性があるのは、源流に残っている自然には、大きな魅力があること。この魅力と「源流の木」の価値を伝えるために小菅村で「黎明祭」を村と東京電力との共催で開催した。

詩人の丹治富美子先生に記念の詩を作ってもらい、村に伝わる230年の歴史



森づくりの現場から

Vol.5

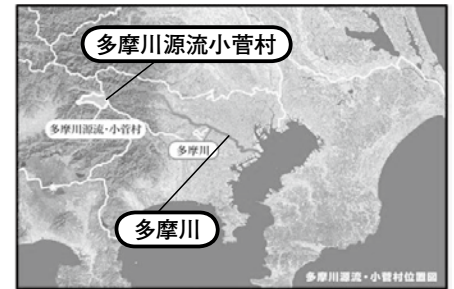
多摩川源流での「百年の森づくり」《後編》

講演 ▶ 矢野康明氏

<東京電力(株)環境部グリーンサポートグループ マネージャー>

のある神楽を舞ってもらった。この神楽は、山の大ヒノキを江戸の大火の時に伐り出した後、疫病が流行ったため、神の祟りだと考え、その祟りを鎮めるために始めたものである。

山の所有者の木下大吉さんが「源流の木」の第1号となるヒノキに斧入れをして、伐採するというイベントを行った。このヒノキは110年経っていた。木下さんの3代前のひいお爺さんが植えたものである。「源流の木」も大田区の修道院や東京農大などでまず使ってもらい、今は先着順といった状態になっている。



4. 新たな文明

都会の住宅は密集はしているが、家族や希薄な「便利さ」を優先した関係。繋がりのない過密な状態である。これに対して森の木々も放置されることによって過密な状態に置かれている。これが「便利さ」や「経済性」を追求してきた現代文明ではないだろうか。

繋がりを失ってしまった我々都会人が、健康や豊かさを取り戻すには、どういふ文明を築いていくか、これから考えていくことになる。多摩川源流研究所

所長の村文明さんは、源流を千回も訪れて、大菩薩峠の懐で源流の文明に出会った。「森の鼓動」を聞き、暮らしと森の繋がりを取り戻し、流域間の連携が取れる文明を目指したいというのが、我々の取り組みの方向性である。

大田区の修道院は、子どもたちが自立するために住む家を源流の木を使って建て始めた。「自然の恵みに、感謝の気持ちを抱くことができる家を造りたい」ということだった。去年の11月に木を伐る儀式、祝別式を行い、感謝の言葉をかけながら木を伐った。60年くらいある年輪を見て、住まいに使われる木が育つまでの時間を知って、子どもたちも感動している様子だった。

今回は、木が育つところ、水源林としての役割なども、皆で学びながら進めて



3代前のひいお爺さんが植え、110年たった源流の木の第1号となるヒノキに斧入れをする山の所有者木下大吉さん

いる。都会の人たちに、山は魅力あるところだが、放置されているという現実を知って貰って、健康に過ごすための資源を共に育てるマーケットを作っていこうと様々な施策を考えている。

＊

——小菅村は元々広葉樹林であったところを針葉樹林に変えたわけだが、今後の継続可能な森林経営の進め方については。

適地適木という概念を基本にしてい

る。以前畑だったところに植えたヒノキは、トックリ病という病気が発生している。山の自然の力を最大限に引き出すために具体的には、3つのゾーンングを行った。

木材資源生産エリアはスギ・ヒノキそれぞれにふさわしい地形・地質・傾斜を見ながら限定していく。水源保全エリアは傾斜のきつところで、ここでは、広葉樹への転換を図るが、広葉樹の経済性も目指していこうということになっている。

もう一つは、人と森との共生を目指す共生林の尾根道は、針広混合の森への転換を図っていく予定。

今までボランティアの人に木材資源生産林で作業をして貰っていたが、間伐作業には危険性も伴うし、効率性も悪い。その代わりに尾根道の再生を荒川の人たちとも一緒に進めていきたい。

尾根道は三峯信仰であったり、富士

講などの山岳信仰の道である。この地域にも金峰山を抜けて富士山に行く古道があった。暮らしと森が密接に繋がっていた古道は流域を跨っているため、古道を再生することで荒川と多摩川の尾根を繋げようと考えている。

二次林も放置されているので、大径木を育てながら、細いところを間引いて光りを入れ、資源の価値を持たせ、クリの木の土台を復活させたいと考えている。

古道は山に人が入らさせて頂くわけだから、そこをボランティアが整備することが重要であると思う。去年この取り組みを源流塾として6回ほど行い、伐った木で炭を焼いた。

荒川流域についても、皆さんとも交流しながら勉強していきたい。目標としては、東京湾に注ぐ利根川、荒川、多摩川、相模川が広域に連携され、水を育む森林を育てていきたい。

大きな河川の氾濫により誕生する洪水池を転々と渡り歩く放浪者。

今回登場頂くのは、日本最大の赤とんぼとして、また絶滅危惧種として知られるオオキトンボである。その名が示すように、大きな黄色いトンボで、羽全体がオレンジ色をしている。

赤とんぼと言えば、秋の虫であり、本種も秋に見かけるトンボである。では、なぜ夏に発行する今回紹介したかという、この秋にぜひ皆さんで、オオキトンボを発見して頂きたいからである。秋に河原で羽がオレンジ色をしたトンボがいたら、オオキトンボの可能性が高い。そんなトンボを見かけたら、ぜひご一報願いたい。

オオキトンボは草原性の種で、草原が広がる平野部の浅い池沼に生息する止水性のトンボである。このため、皆さんは流れのある荒川とは関係なさそうなトンボだと思われるであろう。確かに本流には生息しないのだが、河川敷の沼に見られることがあるのだ。

しかも関東地方の場合、不思議なことにオオキトンボが見つかるのは、大きな川の近くに限られている。すなわち、関東地方でオオキトンボの記録があるのは、鬼怒川、利根川、相模川、多摩川、渡

良瀬川、荒川などである。周囲に草原が広がる池というのは、関東地方では河川敷くりにらいにしか残っていないためかも知れない。しかし河川敷は人為的な変化が進み、最もダメージを受けている環境といえる。オオキトンボの絶滅危惧種指定はその象徴である。

すでに既知産地の82%が失われ、関東地方の場合、千葉、茨城、東京、神奈川では絶滅したという。現在関東地方で

新たに河川敷に造成したワンドやビオトープ池への飛来も期待される。

現在荒川河川敷には、自然再生事業や、市民レベルのビオトープ作りが行われているので、その誘致目標種として、オオキトンボを取り上げて欲しいものである。特定の環境に定着するというより、河川の氾濫により誕生する洪水池を転々と渡り歩く放浪者、それがオオキトンボである。

こうした種では、池の環境は年とともに変化するので、生息地の池の保護だけではうまくいかない。河川敷に多様な池を造成し、トンボに気に入った池を選んでもらうという手法が必要であろう。

この秋、オオキトンボ探しツアーを企画してはいかがだろうか。



NPO法人むさし野里山研究所代表 新井 裕

の確実な発生地は、深谷市の利根川河川敷のみではなかろうか。栃木県真岡市では市の天然記念物に指定したそうだが、ブラックバスの食害などもあり、保護効果はあまりないようである。

荒川周辺では、これまで川島町、東京荒川区などで発見されており、現在でも健在かどうかぜひ確認したいところである。移動性が大きいようであるので、



荒川の魚、特にアユについての『試験研究成果からの提言』●後編

■講演 金澤光 <埼玉県環境科学国際センター自然環境主任研究員>

可能な限り障害物を取り除き、秩父まで魚を遡上させたい

4号で掲載したみずかけ“サ”論での金澤氏の講演の後編である。荒川流域のアユなどの魚類についての極めて貴重な情報と提言が多数含まれている。

アユの産卵場の保全・造成も含めた対策が必要

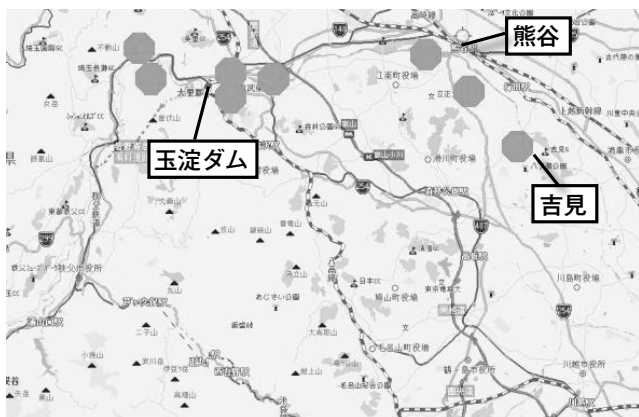
荒川のアユの産卵場は上流は長瀨、下流は吹上である。河口から75km~112kmに位置している。玉淀ダムができた1964年以降、長瀨・皆野に新たに産卵場ができたこと地元の人から聞いている。

アユは成熟すると尻びれの形が変わってくる。白くなっているのが雌で、雄は黒ずんでくる。コロガシ釣りで夕方から産卵をする瀬付きアユを釣ることを楽しみにしている人も多い。

アユは産卵後10日位で孵化する。体長が6mmぐらいの稚アユはゴミと一緒に川を下り、一気に海に行けばしばらく生活をしてから再び川を上る。小動物や付着藻類を食べて若アユとなり、縄張りをもち、成熟しアユは9~10月に産卵をする。1年しか生きないので年魚といわれている。荒川の天然アユは背びれが非常に長いのが特徴である。

平成18年の秋ヶ瀬取水堰での遡上数は、46万匹であったが、産卵場の保全・造成も含めた対策が必要だと思ふ。現在は

■荒川におけるアユの産卵場所



産卵水域に禁漁期間がないので、是非設けて欲しい。新河岸川にも大量に遡上しているので、そこでの資源管理も必要である。

流下仔アユが堰などで止まることなく、一気に東京湾に下ることができるよう工夫も必要ではないかと思う。上ってくるアユは3月の中旬頃に秋ヶ瀬、4月の下旬頃(江南)サイフォンを無事に上れば、5月中旬頃寄居に着くのではないかと思う。

利根川では、2006年は非常に多く、125万匹のアユが上ったが、上武大橋上流で10月1ヶ月間、禁漁区を設けて

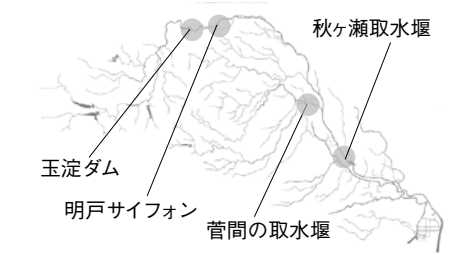


資源管理を行っている。

天然アユは、10月上旬頃から産卵するが、琵琶湖産のアユは9月上旬から10月上旬まで産卵する。産卵期が両者が重なり、琵琶湖産のアユは、海に行くと

死んでしまうので、ハイブリッドになったアユは資源には寄与しないといわれている。

アユは母川回帰の魚ではないので、資源を増やすには、東京湾の資源を豊かにするしかなく、そのためには浅瀬とか干潟といった住みかを保全していかなければいけないと思う。



秋ヶ瀬取水堰にある魚道。出べそ状の古い魚道だが、近年アユの遡上数は増えている。

フラッシングによる人工的攪拌など河川の人的管理が必要に

荒川の河道にある遡上障害物を取り除き、アユ以外の魚たちも同じだが、最終的には秩父まで遡上させたいと考えている。秋ヶ瀬取水堰、明戸サイフォン、六堰頭首工、玉淀ダム、強石の堰、大洞第2ダム、大滝ダム、二瀬ダムなどが障害物になっていると思う。

秋ヶ瀬取水堰について、今一番問題なのは、堰下に砂が大量に堆積していることだ。一時は、砂の違法採取が行われていたが、パトロールが厳しくなって、砂を取る舟が来なくなり、溜まる一方になっている。たまたま魚道がある左岸側に水脈筋ができて、魚が上っているのではないかと考えている。

現在建設が進められている明戸サイフォン後に設置される ハーフコーン型魚道が、上手く機能しない場合は、新しい魚道に作り替えるような考え方が必要なのではないか。そうしないといふ魚道は出来ないだろう。明戸サイフォンの左岸側にあるテトラポットは魚が隠れ場として利用しているのでは是非残して欲しい。コンクリートで護岸されたためにテトラポットが入っているとしか隠れ場が無くなってしまったということだと思ふ。

また、太郎右衛門自然再生事業での堰の設置計画も個人的には反対だ。

明戸地区河道対策整備事業のイメージ鳥瞰図



荒川上流河川事務所が作成した完成予想図。床止め工の真ん中にハーフコーン型の魚道が設置される計画。

ダムができる前は、雪代が解けて土砂が流れて、ある程度河床がきれいになっていた。河床がきれいになることによって付着藻類が生長してアユが食べるコケが豊富に繁茂していた。

現在はダムができたことによって大きな洪水が無くなり、自然の循環がなくなった。それに変わるものとして、神流川の三波石も見た目汚いので、人為的に砂をフラッシングして流し、河床きれいにしようと実施している。荒川でも春先に砂礫をフラッシングして、魚にとっての影響、餌の量などを検証してもらって、ダムのある川では、フラッシングを検討してみたらどうか。

また、昭和40年代には秋ヶ瀬取水堰の上流部、入間川との合流点の間に荒木田土(土壁に使われた土)を取った後

にできた人工的な沼がいくつもあった。稚魚の休息場として、そうした浅場を復活させることは、非常に重要ではないかと思うが、そこには舟が流されないようにしたり、ワンドを管理している人がいた。

これからの河川管理は、人の手を加えて、ある程度石を入れたり、砂を間引いたりする人的管理を実施しなければいけない。秩父でも同じように淵が消失している所があるが、ブルドーザーで淵を復元するように、人の手を入れて管理していくべきだと考えている。

釣り好きの子どもを増やすことが連続性のある荒川再生につながる

人間の生活が優先すべきだが、堰があったら魚が上りやすい魚道を取り付けたり、造り直したりする必要がある。そのことで、河川横断物による上下流の分断を極力少なくして行って欲しい。

県の諮問機関の埼玉県内水面漁場管理委員会という行政委員会がある。委員は、漁業者代表、学識経験者、遊漁者代表から成り、内水面の総合的な利用や漁業生産力の発展のため、河川、湖沼等の採択捕・増殖に関することを調整し

ているが、委員で県内で釣りをしている人は少ない。埼玉県の内水面漁場をどのように管理していくか、アユやダム等を含めた考え方が欲しい。

地産地消という言葉があるが、荒川は東京湾からの恵ものを大切に、利用していった方がいいと思う。

アユだけではなく、荒川に生息する全ての魚にとって、荒川にそそぐいくつかの支流の役割も非常に大切で、種川として荒川が持っていない機能を各支川は持っている。

アユが遡上できる川は最低の内容で、アユより遊泳力の弱く、遡上が下手な魚も多い。そうした魚が楽に遡上できるような生物多様性が高い一本の荒川を目指して欲しいと考えている。

最近釣りをする子供の数が少ない。親も一緒に川に行って貰いたいのが、親が河原でいる間に、子供が川の深みにはまって溺れる事故が久下橋や寄居で起こっている。親が川での遊び方を知らないため親から教育していかないと子供は川に戻って来てくれないと思う。微力だが、田んぼや川の生き物調査などを開催することで、子供たちを集めて川の遊び方を伝えていこうと考えている。

アキアカネ個体数調査のご案内 むさしの里山研究会

アキアカネというのは、日本を代表する赤とんぼで、水田を主な発生場所としています。日本中どこにでも佃煮にするほどたくさんいたトンボです(佃煮にはしないが、以前は漢方薬として黒焼きが売っていた)。ところが、最近アキアカネが激減しているという話が聞かれるようになり、地域によっては絶滅も懸念されています。

希少種が減っているのは仕方ない面



もありますが、どこにでもいた普通種がいなくなる、というのはとても深刻な事態です。このため、全国トンボサミット実行委員会では、今年から3年計画で、アキアカネの生息状況の情報収集を始めました。

むさしの里山研究会では、情報収集の一環として、2の回アキアカネの個体数調査を行います。ご協力下されば幸いです。

《1回目》高地での調査

調査場所●秩父の三峯山

日時●8月11日(土)10時30分~12時30分

集合場所●三峯山駐車場に10時30分(現在ロープウェイは運休中です。西武秩父駅から三峯神社行きの西武バスが運行されています)

持ってくる物●捕虫網、油性サインペン、

飲み物、必要な方は弁当

参加費●無料/雨天の場合●中止

内容●一定範囲にいるアキアカネを捕獲しながら、数えます。方法は二人一組となり、捕まえたアキアカネにサインペンで印を付け、すぐに放します。総数を集計し、時間あたり、人数あたりのアキアカネ数に換算します。今後同じ場所でカウントを続けることにより、その動向が把握できるはずですが、また、各地で同様の調査を行い、比較することによって、全国的な生息実態が掴めるものと期待しています。

《2回目》平地での調査

調査場所●寄居町のおぶすまトンボの里公園周辺

日時●9月24日(月・秋分の日)10時~12時

集合場所●おぶすまトンボの里公園(東武東上線男衾駅から徒歩25分)

持ってくる物、内容は1回目と同じです。

参加費●無料/雨天の場合●中止

問い合わせ●寄居町末野1233-2

むさしの里山研究会事務局

▶ 流域活動団体 ◀ EVENT INFORMATION

● ちょっと出かけてみませんか



イベントについてのお問い合わせは
荒川流域ネットワーク事務所
● TEL&FAX 04-2936-4120
● E-mail: info@ara-river-net.jp
*連絡はできるだけFAXかmailをお願いします。

📅 イベント 🌿 自然観察会 🛡️ 保全活動 🧹 清掃活動 🗣️ シンポジウム 📖 学習会

📅 リバースクール 秩父市

内容 ● 初心者カヌー教室・交流と親睦・自然を学ぶ・ゴミ調査・水質調査など
日時 ● 2007年9月1日(土) 10:30
2日(日) ~ 11:04
場所 ● 長瀬げんきプラザとその周辺
参加費 ● 子ども 3500円 大人 4500円
定員 ● 小学生以上 30名まで
主催 ● NPO法人秩父の環境を考える会・子どもエコクラ
問合せ ● 0494-22-4594 (新井)

📅 里山体験プログラム 寄居町

むさしの里山研究会では、4月から12月まで合計20回の体験プログラムを開催しています。今回は9月から11月までのプログラムを紹介します。

① **9月17日(月・祝日) 『ピザを作ろう』**
里山ギャラリーノアでお手製の釜を使ったピザを作ります。アツアツの焼きたてはおいしいよ。
参加費 ● 子ども 1000円 大人 1500円

② **10月7日(日) 『稲刈りにチャレンジしよう』**
牟礼の体験田んぼで6月に植えた稲の収穫を行います。昔ながらの方法で稲刈り体験!
参加費 ● 子ども 1000円 大人 1500円

③ **10月28日(日) 『ヒツジと遊んで野菜を収穫しよう』**
皆農塾さんで野菜の収穫とかわいいヒツジのふれあい体験を行います。ヒツジの毛を使いクラフト作りも予定しております。
参加費 ● 子ども 1200円 大人 1800円
プログラムの詳細は当会のHPをご覧ください。FAX: 048-581-4540または、mail:tombo2@d1.dion.ne.jpにてお問い合わせ下さい。

🌿 老樹・名木の見学ツアー 秩父市

内容 ● 旧大滝村の中津川の大カツラ、栃本・不動滝のトチノキ、三峯神社の社寺林などをバスで見学する
日時 ● 2007年10月20日(土) 8:00~16:00
集合場所 ● 秩父市役所
参加費 ● 1200円(バス・資料代)
主催 ● NPO法人秩父の環境を考える会
問合せ ● 0494-54-1490 (黒澤)

📅 2007サクラソウトラスト報告会 上尾市

講義 ● 荒川流域におけるサクラソウ自生地への復元・再生の取り組みについて
日時 ● 2007年9月1日(土) 18:00~20:00(予定)
場所 ● 上尾コミュニティーセンター第1集会室
講師 ● 磯田洋二先生(埼玉野生植物研究所所長)
共催 ● 埼玉県生態系保護協会上尾支部、NPO法人エアンハンスネイチャー上尾・江川、サクラソウネットワーク上尾・桶川
問合せ ● 048-781-0887 (小川)

🌿 自然塾 三ツ又・遊んで学ぼう 上尾市

内容 ● 「虫を知ろう・バッタと遊ぶ」
日時 ● 2007年9月8日(土) 9:00~12:00
集合場所 ● 三つ又沼駐車場
参加費 ● 300円(保険代)
主催 ● NPO法人上尾・荒川の自然を守る会
後援 ● 上尾市
対象 ● 親子(子ども3、4歳~小学校低学年)
問合せ ● 048-726-1078 (菅間)

🌿 「(仮称)川越市森林公園」計画地 自然観察会 川越市

内容 ● 「秋の彩りの雑木林でドングリや木の実をさがしてみませんか。」
日時 ● 2007年10月28日(日) 9:30~12:00
集合場所 ● 川越市南文化会館(ジョイフル)
参加費 ● 100円 / 募集 ● 30名
主催 ● 上尾市環境保全団体連絡会
持物 ● 帽子、水筒、筆記具、あればルーペ、双眼鏡
問合せ ● 049-224-8811 (川越市環境政策課)

🌿 第9回 太田ヶ谷 夏の昆虫観察会 鶴ヶ島市

内容 ● 太田ヶ谷の雑木林や沼を歩きながらトンボやチョウなどの昆虫を観察。昆虫好きの人の参加を待っています。
日時 ● 2007年8月26日(日) 9:00~12:00
集合場所 ● 鶴ヶ島市大橋公民館
参加費 ● 200円
共催 ● 鶴ヶ島の自然を守る会
● (財)埼玉県生態系保護協会・川越坂戸鶴ヶ島支部
問合せ ● 049-285-6625 (鈴木)

📅 第8回 大森の池まつり 鳥になろう 魚になろう! 入間市

内容 ● ボート、カヌー乗り、魚・ザリガニ取り、虫取り、水鉄砲作りほか、出店ジュースもあります。
日時 ● 2007年8月26日(日) 10:00~15:00
会場 ● 大森調整池(入間市宮寺)
参加費 ● 100円(保険料)
持物 ● 飲み物、弁当、濡れてもいい服装・靴
共催 ● 大森の池まつり実行委員会ほか2団体
問合せ ● 04-2965-1741 (相馬)

編集後記

7月と8月は、川をフィールドとして活動している団体にとっては、イベントが目白押しで忙しい時期であると思う。情報誌「あらかわ」はそうしたイベントをより多くの流域の人たちに紹介することを目指しているが、なかなか態勢が整わず、せっかく素晴らしいイベントを紹介して頂きながら掲載できず、期待に添うことができないことをお詫びしたい。より充実した流域情報誌を目指してこれからも努力していくつもりですので、各団体の方々には、より一層の御協力をお願いしたいと思う。(鈴木)